

時事新報

第二千四十七號
明治廿一年九月十四日(金曜日)
舊戊子八月九日(戊子)
出版時間
日 出 午 五 時 五 分
月 出 午 五 時 五 分
年 出 午 五 時 五 分
刊 行 時 間
日 出 午 五 時 五 分
月 出 午 五 時 五 分
年 出 午 五 時 五 分
(西曆一千八百八十八年)

(可認省信通)

時事新報定價
時事新報ハ一年三百六十五日一日モ休刊セズ其代價選
送料廣告料ハ左ノ如ク
一 一月前金五十圓
一 三月前金一百五十圓
一 六月前金三百
一 一年前金六百
○ 時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ送致スルモノニ限リ右定價ノ外ニ一箇
月二十六圓ノ郵料ヲ申ス

五號活字	一行二行	一行二行	一行二行
一行至十行	一日以上	二日以上	三日以上
十一行至二十行	六日以上	七日以上	八日以上
二十一行至三十行	九日以上	十日以上	十一日以上
三十一行以上	十二日以上	十三日以上	十四日以上

時事新報

歸朝記事(前號の續) 福澤一太郎氏英文の翻譯
汽船アリタクノ號に乗移るやいなや忽地にして空般
の風景別天地の標を呈したり蓋し此船は英國會社の所
有にして米國船とあらざればなり余が身は最早米國に
於ける一少年に非ずして其品位正しく英國の紳士に等
しき歴然たる一紳士に變化し船中の小使に接するも
聊々横風にしてさか日本風にはあつたれども多少命
令の口調を用ひざる可らず小使と呼ぶ聲に應じて來る
者は臉の邊に赤色を帯びざる英男にして其非するや足
を以てするのみならず肩を以て進み客を見て乃ちサ
と云ふ(サ)とはあなたさまと云ふ意味なり此サの
字は毎語の前にも後にも要用なるが如くよして一サ
又二サ暫時の間に客の耳はサの聲を以て充溢し將
さる耳外に溢れんとするを覺ゆ米國の交際風に慣れた
る心情を以てすれば余は此男に向ひ汝は何故余に接
するに恐怖の狀を爲すや余は鬼にあらず汝の手を出せ
余は親手して朋友たる可しと云はんと欲するものなり
、航海中日曜日遂に英人の習慣として當日は朝夕兩
度チーナ・オツ・インゲンランド(宗廟の名)の儀式を正
しくして禮拜を行ふもとなり朝拜の時刻來り食堂の戸
に拜神の字を見ざるは食堂を以て會場と用ゐるものと知
る可し余は小使に促されて此假の寺院に參詣し其時の
衣服は風を用ひフツナルの精神を放棄して糊糊と白の
シャツに胸も切る、ばかりのカラを着けたるは英國の
信心風に對して敬意を表するが爲めなり禮拜始まり歌
導師は經文の一節を取種々採々例證を引き終りに近
世の文明開化は耶蘇教の賜にして恰も其子に異なら
ず然るに子たる文明開化が所生の母なる聖教に背くは
云々として肩を結び夕星夕星は船中よりリヴァールの
墓園を眺むる爲めに義捐金の相映を催はしり是れは米
國にても毎度見聞したる所にして無告の貧民を助けん
とて人々の私に金を投ずるは實に快く感じし事共あり
航海日を重ねて我アリタクノ號は愛爾蘭の海岸に近
づき朝の天朝として波濤かなりければ甲板に立
て陸地の方を眺るる農民が小區劃の地を耕す其操は日
本に異ならざるが如し近海に山多けれど樹木甚だ稀
本るは同船某氏の機織に海風強きが故あらんと云ふ海
岸は若石突出して船體を成すもの多く、茶色の帆掛け

たる小舟が片々眼を過ぎりて過るは蓋し漁舟ならん無
数の白鵞、波の動揺に連れて我海上宮(汽船)の周圍に
群るは風流を評すれば是れ大地の群臣が吾々の安着
と祝する爲めに来りしかと思はるれども其實は船中よ
り棄る殘餘の食物に集るものなり夫れ是れする中に汽
船のハヤクワン・スマチンに近く船を投し是れより三
十分間の里程と云ふ此クワン・スマチンこそ米國へ出
稼移民の郷國にして斯民や舉動粗野なりと雖も心は
則ち優しく米國に於て車馬厨下の力役は其専有の業と
して支那人の洗濯業に於けるが如し即ち今度の便りも
も歸來する者甚だ多く本船の着港するやいなや陸の方
より小蒸汽船の來りければ夥多の男女は狂するが如く
之に乗移り故郷指して歸るも多情なれクワン・スマ
チンの今日は如何なる會合にして如何なる祝賀なる可
きや之を想像して愉快に堪ざるなり然るに爰に愛爾蘭
人として本船に取殘されたる者一名あり此者は赤貧に
て初め米國出發のとき航海中火夫の用を勤めて船賃の
不足を償はんとすの約條にて便船したる次第あれば本日
着港の時も尙は勤めの事に忙しく何事も心に任せず
して時刻を失ひ漸く甲板に出で上陸せんとすれば同
郷人の乗移りたる小蒸汽船は既本船を去るも半里
ばかり目を見れば見れば身に驚きを如何せん、囊中
亦一錢なきを如何せん茫然として立ち、茫然として泣
き、涙は顔の炭粉を洗ひ流して哀れなる其風情は鬼界
ケ嶋の俊寛も斯くやあらんと想はるはばかりなり然
るに同船の同情は自から又別段のものにして上等客の
相談して一名一レリング宛を投じて三十レリング
を集めてリヴァール港着船の上同港よりクワン・スマ
チンまで歸る可き旅費として之を與へ吾々日本人も其
義捐を興にしたるは快きことなり、本船クワン・スマ
チンを發して翌朝リヴァールの港に着陸を去る
と十四哩の處に投錨せしときは雨天ありしかども吾々
は雨を冒し小蒸汽船に乘りて上陸したり本港は海潮干満
の高低非常に上陸の時干潮なりしが紐育港の如
く機軸より直に大船に上するの便利を見ず蓋しリ
ヴァールに長さ七哩半のドックを設けたるも海潮の爲
めあらんのみリヴァールは天氣は余が曾て想像せし
よりも恐しく晴天雲と烟を以て覆ひ暗色に銅色を交る
が如き甚だ目を悦ばしめず然りと雖も英野の草の緑と
英人の顔の紅は城壁す可くして亦以て天色に不愉快
を補ふに足るものならん、稅關の取扱は合衆國よりも
穏なり、市街の物音も紐育より靜なり、乗合馬車は二
階付にしてドンキーは荷車を引き、履き子供等は既
に往來の人に附きマツチを賣付けん、凡そ是等
は初めて米國より來りし吾々の目に多少の新奇を覺え
しむるものなり吾々の止宿したる旅館の裏手は鐵道の
ステーションとして此旅館は鐵道會社の所轄なりと云
ふ即ち英人の英人たる所以にして會社の商法行届たり
と稱す可し此旅館は他に異なるものなく唯館の男が客
の荷物にステーションに持運ふまでの便利なれども客

官報

(未完)

○傳染馬病 馬の皮膚病は北海道に於て去月十九日よ
り二十五日迄根室郡に新患三頭、樽原全治一頭若手縣
に於て同月二十六日より本月一日迄西閉伊郡に舊患全
治一頭ありたる旨執事届出たり(農商務省)
○海外旅券の附及返納數 大坂府に於て去月中下附せ
し海外旅券の數は三十九枚にして内米國行男三、英
國行男二、露國行男二、清國行男十九、女一、朝
鮮行男一、印度行女二、又海外より歸朝旅券を
返納せし數は四枚にして内香港及朝鮮より歸朝旅券
人なり(大坂府)長崎縣に於て去月中下附せし海外
旅券の數は九十四枚にして内清國上海行男七、女二
人、同天津行男女各一人、同鎮江行女一人、同漢口行
男一人、同福州行女一人、英領香港行男四人、女二人、米
國紐育行女一人、露領滿洲行男二十人、女十二人、同
ニコラエフスク行男一人、朝鮮京城行女一人、同仁川行
男二十人、女三人、同釜山行男六人、女四人、同元山行男
二人、女一人、同各港行男三人、又海外より歸朝旅券
を返納せし數は三十七枚にして内清國上海より男女各
々二人、英領香港より男一人、同新嘉坡より男二人、朝
鮮京城より女一人、同仁川より男五人、女六人、同釜山
より男一人、女二人、同元山より男一人、女二人、露領滿
洲港より男女各々六人なり(長崎縣)

雜報

○氣象欄内の解釋 日々全國の氣象ハ本紙上別に一欄
と設けて掲載することに付き前日午前六時の氣象(但
し雨量は午前六時に終る二十四時間の總計)を知らん
とするには氣象欄内と見て一目瞭然たるべき筈なれど
風力雨量其外所記の文字多くは學問の上より割出し來
りたるものなれば所載簡潔にして通常の人には容易に
解すべきものとあらねば今其道に專門の學者に就て得た
る說明の要を記して不日發表あるべき天氣豫報の語句
と併せて晴雨寒濕の事を明らかにするの案に供すべし扱
佛屋と云ふは一メートル(我三尺三寸餘)の千分の一に
して我三厘三毛に當るものなり例へば最高と最低と氣
壓の差十二佛屋とあれば十二に三厘三毛を乘じて得た
る三分九厘三毛丈け全國の晴雨計に平均を失ひしお
り晴雨計の平均は我國にては七百六十佛屋を目安に立
てし是より以下の低しと云ひ以上は高しと云ふ皆此目
安に對したる言葉にて氣壓の平かならざるを恐るゝの

度合も正よ
ふして其恐
云ひ北東と
の當時現け
ものど其趣
應じて平穩
にて〇の印
の次一は軟
六は颶風あ
以下軟風ま
弱かるべき
向あるもの
どの速力あ
なれども颶
威するときは
示す處の點
て可ならん
よして東京
十七佛屋に
毛と乘じて
此一寸二分
として地上
水降りたり
概ね大雨の
からざるを
甲の地にて
ては百佛屋
覆の外、山
強ち雨量の
て大雨とは
知りたる上
何石と云ふ
は一坪にて
三百八十石
どの面積に
ると得可し
して攝氏に
所載の大略
少に非ざる
二月八日 生
に到らず勿
據なき次第
に踏み迷ひ
過ちの功名
りて愛をだ
得も云はれ
りど雖も今
か彼方の山
たり急ぎ立
ふ尤も一人
み此時生等
人住居をす
を友とする
關係なき一
き男女なら
朝露免の蒸
ア難詰あり
詰るに此山
一入奥床し
元來押人の
す如何に野